

斎藤徳元 二回

伊藤浩睦

若狭京極家に文事応接役で仕えていた斎藤徳元は、連歌の師匠であった里村昌琢のもとへ出入りするようになります。後陽成天皇の弟の八条宮智仁親王の和歌の集まりにも加わります。智仁親王の妻が、主家の京極家の縁戚になる、京極高知の娘であったことによるもので、八条宮邸で徳元は、和歌を愛好する公家や僧侶などとの交友を行ないます。趣味というよりも仕事であり、徳元を召し抱えて文事応接役にした京極忠高の期待に添う活動でした。

八条宮智仁親王の息子の智忠親王に読ませるために、徳元は「尤草子」という書物を書いています。世間のさまざまなものを集めて、面白く紹介する内容で、子ども向けに仮名書きになっていて、身分柄庶民の暮らしや世間のことを知らない智忠親王に、そういうことを教える意味も持っている書物でした。題名は「枕草子」の枕から木偏を抜いたものになっています。

その一方で、豊臣家を解雇されたあと、京都で浪人の身分で、町人相手に俳諧をやっている松永貞徳のもとにも出入りするようになります。

松永貞徳が連歌を学んだのは、里村紹巴で、立場も役目も違っていたので、豊臣家に仕えていたころから親しかったわけではなく、稀に連歌の席で顔を合わせるくらいだったと思われますが、徳元が京都に住むようになってからは頻繁な交際になります。

豊臣家のころは、貞徳は無官の奥祐筆で、徳元は二千石の領主で大名並みの官位を持っていて、京都で貞門俳諧に参加した時には、貞徳の身分が浪人であるのに対して、徳元は京極家の文事応接役ですから、身分には相当な差があります。

年齢も、貞徳が元亀二年（一五七一年）の生まれであるのに対して、徳元は永禄二年（一五五九年）の生まれですから、徳元が十二歳年上であったので、貞徳にしてみれば嵩高い、敬って遠ざけたいような存在であったかも知れませんが、

交際は続いて徳元は貞門俳諧の重鎮と見做されるようになります。

八条宮の和歌の会に出入りして、公家や僧侶と交際して、庶民がやっている貞門俳諧の重鎮である徳元は、身分の高い人たちと庶民を文芸で結ぶような存在にもなって行きます。

そのころの貞門派の師系図には、松永貞徳が上に書かれ、その下に門弟が並ぶ中で、徳元は貞徳と同じ高さで名が書かれていて、貞徳の弟子ではなくて対等な存在となっていました。貞徳も徳元も亡くなって二人の関係が世人に分からなくなると、徳元は貞徳の弟子の一人として名が書かれるようになってしまいます。

徳元は、稲葉一通（臼杵）、小笠原忠真（小倉）、岡部長盛（大垣）、金森重頼（高山）、榊原忠次（館林）、佐久間勝之（長沼）、松平忠利（吉田）、脇坂安元（飯田）、池田長幸（松山）といった大名とも交友がありました。俳諧ではなく連歌の仲間であった人たちですが、美濃の人脈に連なっている人たちもあって、連歌師としての腕よりもその出自によるところが大きい人間関係でした。大名も単なる連歌師とは見ていなかったのです。